星槎帯広キャンパス５周年記念フォーラム

「学校ってなんだろう会議」の模様が新聞記事に掲載されました！

北海道新聞だけでなく十勝毎日新聞にも掲載されました！

学校って

「仲間が欲しかった」「笑い合える場所に」

不登校の経験見詰め〝理想〟を考える

広域通信制高校の星槎国際帯広キャンパス（森実さとみキャンパス長、生徒98人）の開校5周年を記念したフォーラム「学校って何だろう会議」が14日、帯広市内のとかちプラザで開かれた。不登校や登校拒否などを経験した在校生らが、理想の学校の在り方について話し合ったパネルディスカッションの内容を紹介する。

星槎国際高校帯広・5周年フォーラム

小学生の時に不登校を体験した島津舞華さん（1年）は「家族しか支えがなかった。学校に求めていたのは特別な教室ではなく、仲間が欲しかった」と当時を振り返る。同校に通学する中で人との絆を強く実感し、現在は生徒会の活動などで充実した日々を過ごしている。「今は先生や仲間、地域の方々に恵まれてこの場所にいる。学校行事などで地域との関わりが多く、たくさんのことを学べている」と話した。

同じく中学生の時に不登校に悩んだ越坂効市君（2年）は「自然に心から笑い合える場所であってほしい」と理想の学校の在り方を語る。当時の自分には『気を楽に持って、学校に行けない自分を責めるな』と言いたい」と話し、「高校に入れたことがありがたい。学校が生活の中で大切な存在になった」と笑顔を見せた。

2014年に同校を卒業し、現在は大原簿記情報専門学校札幌校に通う土井潤哉さん（2年）は学校に自由がなく、縛られている印象を受けていた。比較的自由な時間が多い同校に通い、「自分が本当にやりたいことは何なのか考える時間ができた」。夢を見つけ、就職先も決まった。「学校は自分が何をやりたいのか、どういう人間なのかを探す場所。勉強だけでなく、遊びや友人との関わりが大切」と感じている。

自身の経験を振り返り、「仲間がいるこの居場所が大切」と話す島津さん（右から3人目）

「社会で生きていくための力を養う所」

在校生・卒業生の保護者会「十勝星の会」からは西川裕紀子さんら2人が参加した。同校卒業生の子どもを持つ西川さんは「学校は本当は社会で生きていくための力を養う所なのではないか」と指摘する。同校の適応指導教室「えみな」を経て、現在1年生になる子どもを持つ母親は「今は子どもが『楽しかった』と学校の話を教えてくれる。大切なのは場所ではなく、受け入れる人。理解してくれる人がそばにいるかどうか」と力を込めた。

生徒と二人三脚で学校生活を見守り、卒業生を送り出してきた同校の下口直矢教諭は「自分の目指すものに何が必要なのかを考えて、学校を活用してほしい」と話す。

星槎大学の鬼頭秀一教授は「どう生きていくのか自分の役割を見つけていくこと」が学校で身に付ける力だと指摘した。

（松田亜弓）

教育

十勝毎日新聞　18面　H27.11.20（金）

「不登校の経験見つめ“理想”を考える」